



水 稲 管 理 情 報

令和 7 年 7 月
J A 志 賀
能登南部営農推進協議会

中生穂肥編

穂肥の適期・適量施肥で、収量・品質確保！！

1 生育概況と当面の管理

- ・コシヒカリの現在の生育は、**草丈、茎数ともに平年並み**となっております。
- ・無効分けつの発生を防ぐため、幼穂形成期(コシヒカリで7月5日頃、ひやくまん穀で7月15日頃)まで中干しを継続し、稲体の健全化を図りましょう。幼穂形成期以降は中干しを終了し、飽水管理を実施して下さい。
- ・今後の管理として、**①「適切な穂肥の施用」、②「中干し終了後から収穫期までの飽水管理」、③「除草と薬剤防除の徹底」**に努めて下さい。

2 出穂予測と穂肥時期の目安 **【ポイント① 適切な穂肥の施用】**

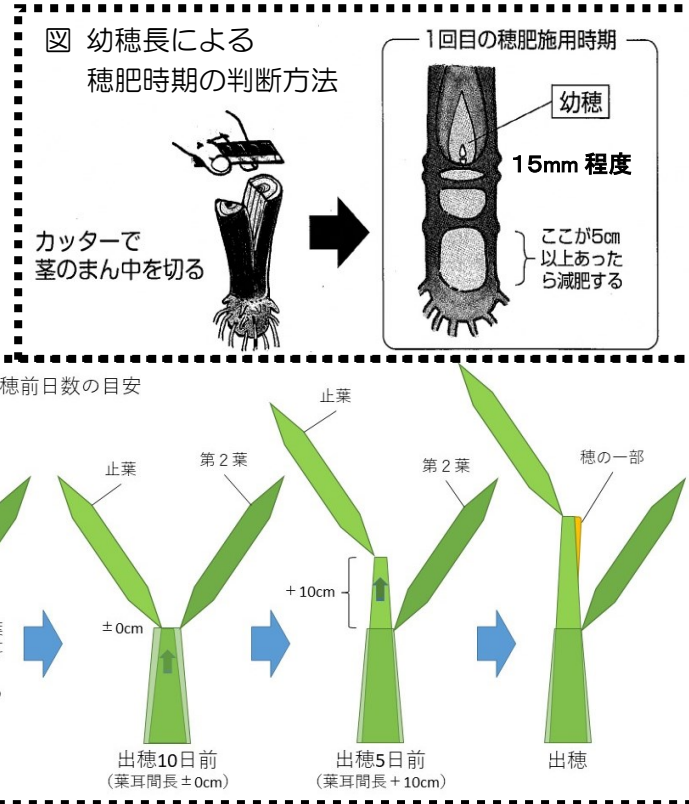
- ・生育状況から推測されるコシヒカリの**出穂期は7月27日～29日**の予想となっております。(6月28日時点)。
- ・田植え時期やほ場条件、気象条件等により出穂期は現在の予想から前後しますので、**分施肥体系では、「必ずほ場ごとに幼穂長(15mm 程度)を確認した上で、穂肥を施用」**して下さい。

葉色が濃く、茎数が過剰で草姿の乱れているほ場の場合

- 1回目の施肥量を減らして施用(もしくは施用しない)し、
- 2回目の穂肥は施肥量を変えずに行ってください。

能登米コシヒカリで基肥 BB 高度056号を 28kg/10a 施用した場合

化学窒素成分量を3割削減させるため、**BB 有機入り能登穂肥一発**または **BB 能登みのり(穂肥2回の合計)**の施肥量の上限は **30kg/10a 以内**として下さい。



【 分施肥体系の穂肥時期と施肥量の目安 】 ※ 分施肥体系の場合は2回目の穂肥を規定通りしっかり施用して下さい。

品 種 名	出穂予測日	穂肥の施肥体系	肥 料 名	穂 肥 時 期 (出穂前日数)		葉 色	施肥量 (10a 当り)
志 賀 米 能 登 米 コシヒカリ	7月28日頃	一発体系	BB 有機入り 能登穂肥一発	7月12日頃(－16日) 幼穂長：15mm 程度		4.0 未満	20～30kg (N3～4.5 kg)
		分施肥体系	BB 能登みのり	1回目	7月12日頃(－16日) 幼穂長：15mm 程度	4.0 未満	10～15kg (N1.5～2.25 kg)
				2回目	7月18日頃(－10日) 葉耳間長：±0cm 程度	—	10～15kg (N1.5～2.25 kg)

注目!! 基肥一発肥料体系での上乗せ追肥 (志賀米・能登米コシヒカリの登熟向上対策)

・基肥一発肥料では基本的に追肥の必要はありませんが、①近年の登熟期の高温による栄養凋落の防止と②収量の向上のため、以下の判断に基づいて上乗せ追肥を検討してみましょう。

★基肥一発肥料への上乗せ追肥★

＜時 期＞出穂7～10日前(葉耳間長0～2cm)

＜判 断＞葉色が 4.0 未満の場合に実施

＜肥 料＞志賀米→能登みのり・追肥550号

能登米→能登みのり

※追肥550号は能登米コシヒカリには使用できません

＜施肥量＞ 7～9kg/10a

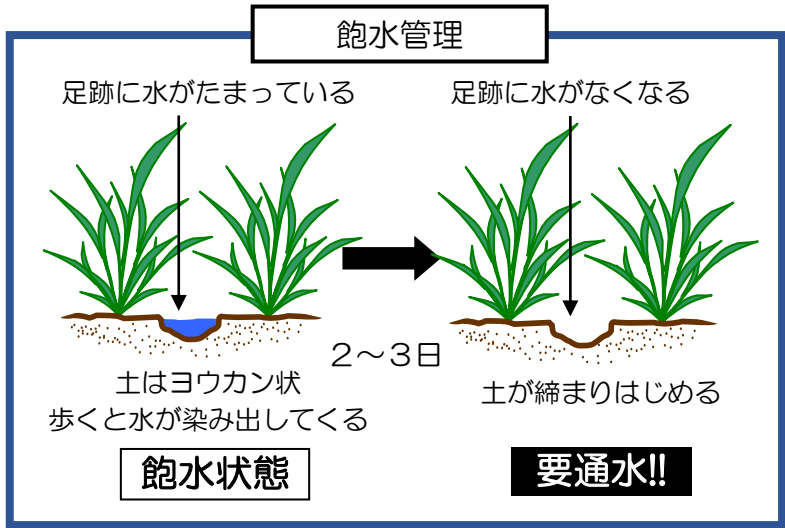
判断時期の葉色をしっかりと見極めて、上乗せ追肥を実践して下さい。



収量確保対策チェックリストを活用して実践状況を確認し、収量確保に努めましょう！！

3 中干し終了後～収穫期までの水管理 **【ポイント② 中干し終了後から収穫期までの飽水管理】**

- 登熟期間の水稻の活力を維持するためには、根を健全に保つことが重要で、適期の中干しに加え、中干し終了後の水管理が大きく影響します。きめ細やかな水管理により、登熟を向上させ、未熟粒の発生を防ぎましょう。
- 水田の温度を上げないためにも通水はできるだけ朝方か夕方に行い、集落や地域ぐるみで計画的な水利用に努めましょう。
- 夏期に湛水状態が続くと水田内の水温が上昇し、根腐れを引き起こします。
そのため、必ず3日以上は湛水はしないで下さい。
- 台風通過後のフェーン等による異常高温にさらされる場合は一時的に湛水し、稲体を守りましょう。現象終了後は速やかに飽水管理に戻して下さい。



(1) 中干し終了後～出穂期までの水管理

- 幼穂形成期(コシヒカリ:7月5日頃、ひゃくまん穀:7月15日頃)以降は、新しい根の発生が少なくなるため、中干し終了後は2～3日間隔を目安に通水し、飽水状態(右図)を保ち、根の活力維持を図りましょう。

(2) 出穂期～収穫期までの水管理

- 出穂期以降は、籾への養分集積(転流)を促進させるため、刈取り直前まで1か月以上は飽水管理を継続しましょう。

4 斑点米の発生防止対策 **【ポイント③ 除草と薬剤防除の徹底】**

(1) 除草

① 畦畔除草

- 斑点米カメムシの生息密度を下げるため、7月10日頃までに地域・集落ぐるみで畦畔や農道等の一斉仕上げ除草を実施しましょう。
- ◎ 7月中旬以降の除草は、斑点米カメムシを本田に追い込むこととなるので、基本的には行わないで下さい。
(※頻繁に除草している場合に限り、継続除草は可能。) やむを得ず、除草する場合は、薬剤防除の直前に行ってください。

② 本田除草

- 本田に雑草の取りこぼしがあるとカメムシを呼び込むこととなるので、収穫前日数に注意しながら本田除草剤を施用しましょう。
- ※ 中生品種の目安 : 収穫30日前まで(クリンチャー等)→7月31日頃まで、収穫45日前まで(アトリ等)→7月16日頃まで散布時期間際に本田除草剤を使用した場合は、収穫前日数が確実に経過してから収穫して下さい。

(2) 薬剤防除

- ① 粉剤体系 : 粉剤防除では防除効果を高めるため、風の無い時間帯で、散布後3～4時間は降雨がない日に散布して下さい。

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	トレバリダビーム粉剤 DL 【2成分】	3～4kg	7月24日～27日頃	出穂始め防除
2回目	いもち病、カメムシ類	ラブサイドキラップ粉剤 DL 【2成分】	3～4kg	8月4日～8日頃	出穂期7～10日後(穂揃期)
3回目	カメムシ類	キラップ粉剤 DL 【1成分】	3～4kg	8月11日～14日頃	出穂期14～17日後(傾穂期)

化学合成農薬成分の数です。

- ② 液剤体系 : 液剤防除は散布に労力はかかりますが、安価なため、コストを抑えることができます。

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	ビームエイトトレボンゾル 【2成分】 + バリダシン液剤5 【0成分】	650倍・100L 1000倍・100L	7月24日～27日頃	出穂始め防除
2回目	カメムシ類	キラップフロアブル 【1成分】	1000～2000倍 ・60～200L	8月4日～8日頃	出穂期7～10日後(穂揃期)
3回目	カメムシ類	キラップフロアブル 【1成分】	1000～2000倍 ・60～200L	8月11日～14日頃	出穂期14～17日後(傾穂期)

- ③ 粒剤体系 : 粒剤防除は一人で散布でき、粉剤のような飛散(ドリフト)が少ないため、市街地等でも散布ができます。

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	ワイドパンチ豆つぶ 【2成分】	250g	7月16日～18日頃	出穂期10～12日前頃 (散布後4～5日の湛水)
2回目	カメムシ類	キラップ粒剤 【1成分】	3kg	7月31日～8月4日頃	出穂期3～7日後 (散布後4～5日の湛水)

5 随時防除 : 病害が発生した圃場には治療のため、前年に発生した圃場には予防のため、防除を実施しましょう。

病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	摘要
いもち病	ブラシン粉剤 DL	3～4kg	【治療剤】病害の発生を確認したら直ちに散布(収穫7日前まで)
紋枯病	モンセレン粉剤 DL	3～4kg	【予防剤】前年発生地では出穂10～20日前に散布(収穫21日前まで)
稲こうじ病 墨黒穂病	Zボルドー粉剤 DL	3～4kg	【予防剤】常発地では出穂10～14日前に散布 (出穂10日前以降は薬害の恐れがあるので散布しない)

～農作業中の熱中症に気を付けましょう～

- 暑さに慣れていないと熱中症になる危険性が高まります。
こまめな水分補給・休憩や通気性の良い衣服の着用など、対策を行い、日中の暑さに備えましょう！

